

第108回 三方限古典塾（'15, 10, 15）

洪 自誠（1561～1616）「菜根譚」（その3 - 25）

1 賓朋雲集し、劇飲淋漓として楽しむ。俄かにして漏尽き燭残り、香銷え茗冷やかにして、覺えず反って嘔咽を成し、人をして味無からしむ。天下の事も率ね此れに類す。人奈何ぞ早く頭を回らさざらん。 後集10

（意識） 賓客や朋友が集まってきて、盛んに酒を飲んでいつまでも飽きもせず楽しんでゐる。ところが気がつくのと、夜もふけて燈火も少なくなり、香も消え、お茶も冷えると、思わずむせび泣くような心境になって、なぜか人々は興ざめのようになる。

世の中の楽しみや悲しみ、歓楽や虚栄、名誉や富なども、概ねこれと同じようなものだ。なぜ人々は、そのことに気付いて本来の姿に戻ろうとしないのか。

（余説） 禅語の「照顧脚下」（脚下を照顧する：時世に流されることなく、自己の足下をよく凝視して反省し、己の本来在るべき姿を考えよ）ということでしょうか。

仏典に、コーサラの国王が4人の王を招待した時の話があります。その席で、もろもろの快樂のうち、最上のものは何かという議論になりました。5人の王はそれぞれ「見る」快樂、「聞く」快樂、「香り」の快樂、「味」の快樂、「触れる」快樂を最上であると主張しました。それで、釈尊に裁定をお願いしたところ、「〇〇をもって最上とします」と答えられました。あなたは「〇〇」に何を入れますか。（答えは2枚目の最後にあります。）

（参考）漢武帝（前156～前87）「秋風辞」

「歡樂極まって哀情多し。少壯幾時ぞ老いを奈何にせん。」

2 個中の趣を会し得れば、五湖の煙月も尽く寸裡に入る。眼前の機を破り得れば、千古の英雄も尽く掌握に帰す。 後集11

（意識） 一つの物事の中に隠されている本質を理解することができる、古来から美しいとされる鄱陽湖や洞庭湖など五つの湖の景観も、その地まで行かなくても、そっくりわが心の中に納めて味わうことができる。

目の前に現れた重要な物事の本質を見破ることができる、千年も昔の古代からの英雄もすべて自分の手中に収めて、自由自在に動かすことができる。

（余説） 現在、自然界の事象や社会の事象など、さまざまの課題があります。そこでは、大きな変化が多角的に起きているように見えます。しかしそのような事象も、その本質をたどれば一事に帰する。つまり、禅語の「万法歸一」「万法即一心、一心即万法」に通じるものであろうと考えます。

現在、国の内外や身近なところで問題とされている物事について、その本質を理解し、見破ることは極めて大切なことと思われまふ。しかし、現実にはなかなか難しいことですが、その視点を常に持って考えることはできそうです。そうして、できることなら、天下の景勝や古来の英雄を「自家菜籠中の物」にしたいものです。

（参考）漢武帝・秋風辞 「歡樂極まって哀情多し。少壯幾時ぞ老いを奈何にせん。」

中国における五湖 「鄱陽湖・洞庭湖・太湖・青草湖・丹陽湖」

3 石火の光中に、長を争い短を競う。幾何の光陰ぞ。蝸牛の角上に、雌を
 較べ雄を論ず。幾大の世界ぞ。 後集 13

(意識) 石を打ち合わせて発する火花のような短い時間にすぎないこの人生において、どちらが長いか短いことや速いか遅いかなど、細かいことで競い争っている。そのような人は、己の一生には一体どれほどの時間が与えられていると思っているのか。

また、蝸牛の角の上のように狭いこの世界に住みながら、勝った負けたなどと較べ騒いでいる。己が生きている場所は、一体どれ程の広さがあると思っているのか。

(余説) 極めて短い時間(石火)と極めて狭い空間(蝸牛角上)に生かされている人間への戒めです。「蝸牛角上」は莊子即陽篇の故事に基づきます。

地球の誕生が46億年前、生命の誕生が40億年前。人の一生はせいぜい頑張っても限られた空間での百年に過ぎません。中唐の詩人白居易は、「蝸牛の角の上のように狭い所で一体何を争うのか。この世の人は、火打石の光の一瞬の中に身を寄せているようなものだ。富めば富んだで、貧しければ貧しいなりに、しばらく楽しもうではないか。口を開けて笑わない者はバカだよ。」と歌っています。こういう視点も時には必要でしょう。

(参考) 白居易『酒に対す』「蝸牛の角上に何事をか争う。石火の光中に此の身を寄す。富に随い貧に随いて且く歡樂す。口を開いて笑わざるは是れ痴人」

4 人、肯て当下に休さば、便ち当下に了ず。若し個の歎む処を尋ぬるを
 要めば、即ち婚嫁完しと雖も、事も亦少なからず。僧道好しと雖も、心も
 亦了ぜず。前人云う、「如今休し去らんとせば、便ち休し去る。若し了時を
 覓めば、了時無からん」と。之を見るに卓なり。 後集 15

(意識) 人は何事につけ、やめようと思いついたその時に、思い切ってやめれば全てが解決する。もしやめるのに適当な時を考えていても、例えば嫁取りや嫁入りなど大事なことを済ましてからと思いついても、やらないといけないことは一向に減らないのと同じだ。また、出家して僧になったらと考えても、悟りは開けず問題は解決しないのと同じだ。

古人の詩にも「今すぐやめれば、やめることが簡単にできる。やめる時期を見計らっていたのでは、いつまでもその時はやってこない」とある。実に優れた見解である。

(余説) 物事を始めよう(やめよう)と思いついたら、歴の好し悪しなど考えず、すぐに始める(やめる)のがよいということです。「思いついたが吉日」です。特に趣味や健康への対応などは、モチベーションが高いその時に始めるのが効果的だと思います。

しかし、じっくり検討してから、しっかり準備をしてから、いい時期を待ってからということも多いのが世の常であり、そこが人生の難しくもあり面白いところです。

自分にとって「一の大事」の好機を見極めることは、存外に難しいですが、短い一生だからこそ大切です。徒然草にも「法師になろうと思いつち、そのための準備をあれこれする間に歳を取って道を逸れてしまった」という落語のような話があります。

釈尊の答えは「適度にかなうをもって最上の快樂とす。」でした。

お馴染み「天下の事過ぐれば則ち害あり」「過ぎたるは猶及ばざるが如し」です。